片手動作での脱衣と衣服の形態の関係

貝淵正人[1)]・金井三久[2)]

1) 新潟医療福祉大学
2) 有限会社コットンハウス（デザイナー）

【はじめに】

脳卒中片麻痺者のADLの中で自立しづらいもののひとつとして更衣動作がある。訓練の中で、着衣に関してはよく訓練され、訓練方法も様々な戦略（分割法、モデリング、marking、backward chainingなど）が報告されている。しかし、片麻痺者の更衣動作について、片手動作による脱衣方法を報告しているものは少ない。

今回我々は、片麻痺者の脱衣動作を衣服の形態という視点から考えてみた。

【目的】

脳卒中片麻痺者が脱衣しやすい衣服の形態および脱衣動作の方法を検証することである。

【方法】

被検者は本学女子学生1名、右利きである。普段着ているブラウスは9号である。

被検者は右側上肢に肘固定用装具を装着し、肘90度屈曲にて固定した。

衣服は9号のブラウス（以下、スタンダード）と、非麻痺側の袖ぐりの太さを変えたもの（スタンダード＋1cm、＋2cm、＋3cm）と非麻痺側側の肩幅を変えたもの（スタンダード＋1cm、＋2cm、＋3cm）の7種類を作成した。

被検者に、片麻痺者が脱衣する方法の5通り（肩から脱ぐ、襟を取って引っ張って脱ぐ、非麻痺側大腿部に引いて袖を抜く、服の端をもって脱ぐ、上肢だけで袖を抜いて脱ぐ）を十分練習させた。その後、それぞれの衣服にて脱衣動作をおこない、脱衣の所要時間を計測した。

【結果】

結果の1例を図に示す。どの脱衣方法でも、袖ぐりがより太いほうが、また肩幅がより広い方が、スタンダードなブラウスの脱衣よりも所要時間は短かった。

他の4通りの脱衣方法でもほぼ同様の結果が得られた。

【考察】

脱衣動作には、身体的要素（頚・上肢ROM、上肢長、深部感覚、筋力）と衣服の要素（衣服の伸び、滑りやすさ、大きさ）が関連している。Kimらは、麻痺側上肢の肩関節ROMが着脱衣の作業に影響すると述べている。またWilliamsらは着脱衣には、非麻痺側上肢の動きの協調性など総合的な能力が必要であるとしている。

今回我々は、片麻痺者の脱衣動作に関して、衣服の要素に着目したが、非麻痺側袖ぐりの太さ、非麻痺側の肩幅の広さが影響することが確認された。

今度は、より影響を与えているのは、いづれの要素か、その原因は何か、分析・研究を進めたい。

そもそも、片麻痺者の脱衣は、非麻痺側肘部が衣服の袖から抜ける工程が重要である。したがって、この「肘部を抜く」ということに関して、肩幅を広げたり、袖ぐりを太くするということが関係しているのであろう。

川原らによれば、脳卒中片麻痺者の片手動作での前開き衣服の脱衣方法は、5通りであるとしている。今回は、この先行研究に従って、5通りの脱衣方法を施行したが、これ以外の脱衣方法の存在の可能性もある。より効率的でより安全な脱衣方法を模索するため、他の脱衣方法も検討したい。

我々作業療法士が、脳卒中片麻痺者の脱衣動作訓練をおこなう際には、衣服の形態を変化させるのもひとつの戦略として有効であることが示唆された。ただし、こんかい作成したブラウスは左右非対称であり、より普通に近いユニバーサルなデザインのブラウスの開発も必要であろう。

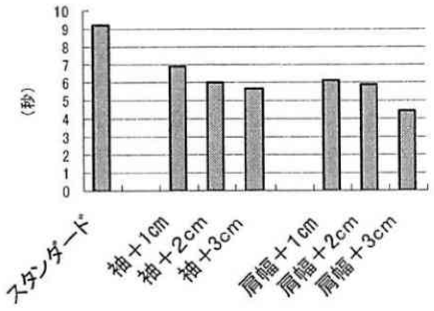

図. 衣服の形態別の脱衣所要時間（肩から脱ぐ）

Key Words：更衣動作　片手動作　ＡＤＬ